

# 『明状元図考』 訳注 (稿) 三

Ming zhuang-yuan tu-kaō (3)

鶴成久章

TSURUNARI Hisaki

(国際共生教育講座)

(平成二十一年九月二十四日受理)

## 卷二 (承前)

### 状元錢福

弘治三年庚戌 廷試錢福等二百九十八人、擢錢福第一。

按、錢福、字與謙、號鶴灘、直隸華亭人。少而穎異。及長、隆準秀目、

志意高遠。丙午中鄉試、入國學、屢試首多士。庚戌禮部試第一、爲文不

屬草。廷試策三千餘言、辭理精確、若宿構然。彌封官以無藁難之、衆謂

科場必欲其藁者、防代作也。今 殿陞問萬目所視、何嫌之避。閣老劉文

穆健得之、贊不容口、請于 上賜第一。時年三十。幼時病劇、父夢人語

曰、爾子吳寬也。時吳文定尚家食、後連舉省殿三元、與文定相符。 狀

元記事初赴試入京、寓於民家。其室中有神像、神夜托夢于其主、求他徙

曰、有狀元在、吾不能安逸也。 狀元錄宋時華亭學有狀元坊、爲衛涇立也。

景泰間、葉守冕重建於豐樂橋下、題其柱曰、九重華選魁多士、千古清風

啓後人。時以爲攀援、蓋江非華亭產也。弘治己酉、西門火坊爲延燎、市

人譁曰、燒却假狀元、出真狀元矣。明年福果魁天下。讖緯之言、亦有不  
誣。

是榜兄弟同登者、莆田方良永、良節、秀水陶煦、陶照、同父母、吉水  
彭杰、彭桓、興國徐鉞、徐鈺則同祖。

【校勘】「江」は、「涇」の誤り。



弘治三年（一四九〇）、殿試に臨んだ士人は錢福等二百九十人であり、錢福を第一位に選んだ。

考えるに、錢福は、字は与謙、号は鶴灘、直隸華亭の人である。幼いときから才能が抜きんでていた。成長すると、鼻が高く秀でた目つきとなり、ころばえは高遠であった。成化二十二年（一四八六）郷試に合格し、国子監に入学すると、試験で多くの学生達の中でたびたび首席となった。弘治三年会試で第一位となったとき、答案を作成するのに草稿を書かなかつた。廷試の対策は三千言余りで、文章内容と表現の精確さは、まるで事前に準備した文章のようであった。弥封官「の一人」は草稿が無いことを責めたが、「彼以外の」多くの人々は、「試験場で草稿を必要とするのは、代作を防止するためである。今、宮殿の中、衆人環視の場で、いかなる嫌疑を避ける必要があるか。」と言った。閣老の劉健（字は希賢、洛陽の人、天順四年進士）はこれ（錢福の対策）を手にすると、称賛の言葉すらなく、皇帝に第一位を賜うよう請願した。この時、三十歳であった。「錢福が」幼少時に重い病気にかかった際、父が見た夢で、ある人が「お前の子は呉寛（既出）であるぞ。」と語りかけ

てきた。当時、呉寛はまだ仕官していなかったが、後には会試と殿試で連続して首席となった、「その点で」文定と同じであった。

『状元記事』話はさかのぼるが、「錢福は」試験に赴くため京師に入つて、民家に寄寓した。その家には神像が有り、「その」神は夜その宿の主人の夢に現れて、彼（錢福）に他所に移つてくれるよう求めて言った、「状元が居ると、わしは落ち着かぬ。」と。

『状元録』宋代、華亭儒学に状元坊があった。衛涇のために立てたものである。景泰年間に、松江知府の葉冕（字は拱辰、上虞の人、正統十年進士）が豊楽橋の下に重建し、その柱に、「衛涇は」朝廷で顕貴な職位を得て多くの士の頂点に立った、とこしえの清風は後人を啓発し続けるであろう」と題した。時人は郷土びいき「のこじつけ」だと思つた。つまり、涇は華亭の生まれではなかつたからである。弘治二年、西門から出た火が街まで延焼した。市場の人々はかまびすしく言った、「偽の状元を焼き払つたら、真の状元が現れるであろう。」と。翌年、果たして錢福が天下第一となった。讖緯の言葉も偽りではなかつた。

この榜では兄弟が同時に合格した者として、莆田の方良永（字は寿卿）と良節（字は介卿）、秀水の陶煦（字は時和）と陶照（字は時明）が両親が同じであった。吉水の彭杰（字は景俊）と彭桓（字は景武）、興国の徐鉞（字は用寧）と徐鉉（字は用礪）は祖父が同じであった。

【注】①彌封官……郷試、会試、殿試の際に、受験生が提出した答案の姓名や三代履歴といった個人を特定できる情報が書かれた部分を封印する作業を監督した役人。この科の弥封官は、礼部左侍郎賈斌以下八名であった。②科場必欲其藁……『明太祖実録』卷百六十「洪武十七年三月戊戌朔」に、「舉人試卷及筆墨硯自備。每場草卷正卷各紙十二幅、首書三代姓名、及其籍貫年甲所習

經書。在內赴應天府、在外赴布政司印卷。會試、殿試赴禮部印卷。」とあって、殿試においても草稿を書くのが通例となっていた。

③ 殿陞間……当時の殿試は奉天殿で挙行された。なお、奉天殿は嘉靖三十六年に消失し、再建後名称を皇極殿に改め、四十一年以後ここで殿試が挙行された。

④ 閣老劉文穆健……『弘治三年進士登科録』(天一閣明代科挙録選刊)によれば、劉はこの科の読卷官十三名の内の一人。官は礼部右侍郎兼翰林院学士で席次は十番目であった。

⑤ 状元記事……未見。

⑥ 状元録……『皇明歴科状元録』卷四。字句にわずかな異同があるが、ほぼ同文である。

⑦ 状元坊……状元の郷里などに、その榮譽を称えて建立した牌坊。状元の出身地の各地にあった。

⑧ 衛涇……宋の人。字は清叔、華亭の人、淳熙十一年の状元。

⑨ 九重華選魁多士、千古清風啓後人……(訓説)「九重の華選は多士に魁たりて、千古の清風は後人を啓かん」

【補説】図は『状元記事』の内容をほぼそのまま描いたものである。

### 状元毛澄

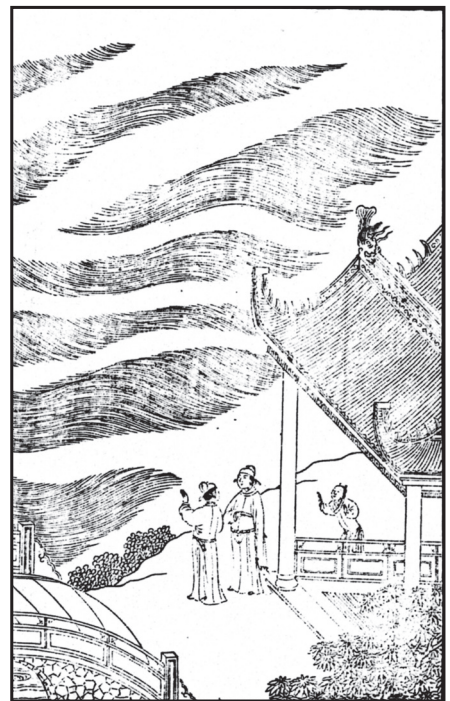
弘治六年癸丑 廷試、汪俊等二百九十八人。擢毛澄第一。

按毛澄、字憲清、號三江、直隸崑山人。少不利於有司、年三十四、舉殿元及第、授脩撰。年六十三卒于道。

崑山志註宋淳熙中崑山有一道人、誦

識云、潮過夷亭出狀元。知縣葉子強遂建問潮館於駟馬橋下。後潮復遠過

夷亭。癸丑丙辰二科、毛、朱皆狀元。人謂舊識之應云。



弘治六年(一四九三)殿試に臨んだ士人は汪俊(字は抑之、弋陽の人)等二百九十八人であり、毛澄を第一位に選んだ。

考えるに、毛澄は、字は憲清、号は三江、直隸崑山の人である。若い時は受験でうまくいかなかったが、三十四歳で状元及第し、修撰を授けられた。六十三歳の時に「致仕して郷里に送られる」道中に卒した。

『崑山志』南宋の淳熙年間(一一七四〜八九)、崑山に一人の道士がいて、予言を唱えて言った、「潮が夷亭を過ぎれば状元が出る。」と。知県の葉子強(龍泉の人)はかくて問潮館を駟馬橋のもとに建てた。後、潮がまたはるか夷亭を越えた。弘治六年と九年の二科で、毛澄と朱希周がともに状元となった。人々は昔の予言が当たったのだと言った。

【注】①殿元……状元に同じ。②崑山志……諸書に引用が見られるが、原典は未見。③夷亭……亭の名ととってよいのか未詳。

【補説】図は、『崑山志』の内容に基づき、問潮館で夷亭を越えて満ちてくる潮を眺める様子であろう。



### 狀元朱希周

弘治九年丙辰 廷試陳瀾等二百九十八人。擢朱希周第一。

按、希周、字懋忠、號玉峰、直隸崑山人。赴會試見月華五色甚麗。又某氏夢文天祥來、周主其家。蓋天祥宋丙辰狀元也。有卜新狀元者、太祖姓中求文武。<sup>注②</sup>蓋公姓名也。年二十四 廷試第一、累官吏部尚書。臨終戒其子、不得請恩于朝、願無以文爲諡犯父之諱。卒年八十四、贈太子太保、諡恭靖。 庚巳編吳人舊傳云、穹窿石移、狀元來歸。弘治乙卯、城西穹窿山、風雨中一大石自走下、見者驚呼、乃止。明年公應其兆。計石移時、公猶爲諸生云。

是科進士有孟春、季春、夏鼎、周鼎。閣老李東陽口占云、孟春、季春、惟少仲。夏鼎、周鼎、獨無商、天然奇句也。



弘治九年（一四九六）殿試に臨んだ士人は陳瀾（字は本初、山陽の人）等二百九十八人であり、朱希周を第一位に選んだ。

考えるに、希周は、字は懋忠、号は玉峰、直隸崑山の人である。会試に赴いた際、月の光を見ると五色に光り輝いて非常に麗しかった。さら

に、ある人が文天祥がやって来る夢を見た「後で」、希周はその家に宿った。思うに、天祥は南宋の宝祐四年（一二五六）の狀元であった。新しい狀元を占う者がいて、「その結果は」太祖の姓（朱氏）で、文王・武王「の事績を」希求する者ということであった。「それは」何と公の姓名であった。二十四歳の時に廷試で第一位となり、昇進して吏部尚書となった。臨終の際に子供に、恩寵を朝廷に請うてはならない、文を「私の」諡にすることで父の諱を犯すことのないように、と戒めた。卒年は八十四歳、太子太保を贈られ、恭靖と諡された。

『庚巳編』呉の人々には古くから、「穹窿山の石が移動すると、狀元が帰ってくる」という言い伝えがあった。弘治八年（一四九五）、街の西の穹窿山で、風雨の中、大石が一つ自然に動いて転げ落ちた、「それを」見た者が驚いて叫ぶとやると止まった。翌年、公がその予言に応じたのである。石が移動した時期を計算すると、公はまだ生員の頃であったという。

この科の進士には、孟春（字は允之、沢州の人）、季春（字は体仁、高郵の人）、夏鼎（字は汝梅、貴溪の人）、周鼎（字は定之、茶陵の人）がいた。閣老の李東陽（字は賓之、号は西涯、茶陵の人、天順八年進士）は即興で言った、「孟春、季春、ただ仲「春」を欠くのみ。夏鼎、周鼎、ひとり商（殷王朝）のみ無し。」と。天然の奇句である。

【注】①文天祥……南宋末の忠臣。字は宋瑞、号は文山、吉州（江西省吉安）の人。 ②文武……周の文王と武王。 ③庚巳編……卷九「瑞蓮」に見える。「風雨中一大石自走下、見者驚呼、乃止」の部分が、「風雨中、有大石自」となっている。 ④閣老李東陽……この科の読巻官十二名のうちの一人。官は礼部右侍郎兼翰林院侍読学士で席次は八番目であった。

【補説】図は、文天祥がやって来る夢を見た者の家に宿を借りようとする場面であろう。

### 狀元倫文叙

弘治十二年己未 廷試倫文叙等三百人。擢倫文叙第一。

按文叙、字伯疇、廣東南海人。年三十三狀元及第。正德癸酉主應天鄉試、仕至諭德尋卒。陸深文集注①長子以諒解元登第、以訓丁丑會元 殿試

第二、少子以誥登進士。一家之中、父子兄弟並策名魁元注②策名、當世如南海之倫氏、前乎未之有也。故天下稱之曰、三倫。狀元紀事注③廣州城南、隔河有地名河南。相傳云、河南人見面、廣東狀元見。是歲大旱、海珠寺注④露南岸人往來對見、文叙魁天下。



弘治十二年(一四九九)殿試に臨んだ士人は倫文叙等三百人であり、倫文叙を第一位に選んだ。

考えるに、文叙は、字は伯疇、広東南海の人である。三十三歳の年に

狀元で及第した。正徳八年(一五一三)には応天府郷試の主考官を務め、諭徳にまで昇進した後に卒した。

『陸深文集』長男の以諒(字は彦周、正徳十五年進士)は「正徳十一年広東郷試に」解元で登第し、以訓(字は彦式)は正徳十二年の会元で殿試では榜眼であり、少子以誥(字は彦羣)も進士となった。一家のうち父子兄弟がみな高位で科挙に合格するという、当世の南海の倫氏のようなことは、前代未聞のことであった。それで天下「の人々」は彼らを「三倫」と呼んだ。

『狀元紀事』広州城南の河を隔てた所に河南と呼ばれる場所があり、「河南を人が目にすると広東に狀元が現れる。」という言い伝えがあった。この年は大変な旱魃で「河の中洲に在った」海珠寺の南岸が露わになり、人々が行き来する際にそれを眼にすることとなり、文叙が天下第一となった。

【注】①陸深文集……「長子以諒解元登第、少子以誥登進士。」の部分を除いたあとの部分は、『儼山集』卷四十「送倫編修彦式婦娶序」に見える。②策名……科挙に合格することを言う。③狀元紀事……未見。④海珠寺……廣州城南の東南にあった慈度寺のことであろう。

【補説】図は、天下に科名をとどろかせた倫氏の父子四名が勢揃いした場面であろう。

### 狀元康海

弘治十五年壬戌 廷試魯鐸等二百九十七人、擢康海第一。

按、海、字德溥、號對山、陝西武功人。年二十八舉進士第一、授脩撰。尋以事罷、家居嘗賈于維揚、以混其迹。治世餘聞注①廷試策問、任輔相以

脩庶政之意。首相劉公健<sup>注③</sup>主通書心純<sup>注④</sup>二字。海對策起句云、天下有不易之事、人君有不易之心、擢第一。義命編魯鐸湖廣景陵人、康海陝西武功人。弘治壬戌春初、京師有善占天文者。禮部諸公詰之曰、魁在何處。占者曰、文星<sup>注⑥</sup>在楚、魁當在湖廣。越一月、將揭曉、復命占之、占者訝曰、文星入楚淺、入秦深。魁當在陝西。後鐸中會元、海中狀元。人事之上應天象如此。



弘治十五年（一五〇二）殿試に臨んだ士人は魯鐸（字は振之、号は蓮北、景陵の人）等二百九十七人であり、康海を第一位に選んだ。

考えるに、海は、字は德灑、号は対山、陝西武功の人である。二十八歳で進士第一に挙げられ、修撰を授かった。ついである事件がもとで罷免され、かつて商いをしたことのある維揚で家居し、行方をくぐらました。

『治世餘聞』廷試の策問では、「皇帝は」諸々のまつりごとを整えるという主旨にするよう大臣に一任した。首相の劉健（既出）は『通書』の「心純」の二字を主題とした。海の対策の起句に、「天下には変わらぬ事があり、人君には変わらぬ心がある」とあったことから、第一位に抜擢した。

ぬ事があり、人君には変わらぬ心がある」とあったことから、第一位に抜擢した。

『義命編』魯鐸は湖広景陵の人であり、康海は陝西武功の人である。弘治十五年初春のこと、京師に天文占いが上手な者がいた。礼部の諸公は彼を問い詰めて言った、「第一位になる者はどこにいる。」と。占者は言った、「文星は楚にあるので、第一位の者はきつと湖広におりましよう。」と。一月たつて、「会試の」合格発表が間近に迫つた時期に、再び占うよう命じると、占者は怪訝そうに言った、「文星は楚には浅くしか入つておらず、秦に深く入つております。第一位の者はきつと陝西におりましよう。」と。後に鐸は会元となり、海は状元となった。人事はこのように天象と上下相呼応するのであった。

【注】①治世餘聞……下編卷三。字句に若干の省略が見られる。②廷試策問……「天下有不易之事」は、『弘治十五年進士登科録』（天一閣明代科挙録選刊）には、「天下有不可易之道」とある。③首相劉公健……この科の読巻官

十四名の首席で、官は戸部尚書謹身殿大学士。④通書心純二字……『通書』

「治第十二」に、「心純則賢才輔、賢才輔則天下治、純心要矣。」とある。⑤義命編……未詳。⑥文星……文昌星またの名は文曲星のこと。文運を司ると考えられていた。

【補説】図は、『義命編』に基づいて占者が天文を見て状元の居場所を占う様子を描いたもの。

#### 狀元顧鼎臣

弘治十八年乙丑 廷試董玘等三百三人、擢顧鼎臣第一。

按、顧鼎臣、字九和、初名全、號未齋、崑山人。舉進士第一、時年



三十三、卒年六十八。父恂餘五十而生鼎臣。既壯、每夜焚香表祈父壽、願以己壽益親。一夕夢黃鶴從天飛來、近視之即所焚表也。後一大院字、未有硃批字數行末云、自此以後、聞田單火牛、通行無滯。蓋乙丑之兆也。父年八十及見其子登狀元。父嘗夢鼎臣爲狀元、初欲以名其孫潛不果、乃命其少子果然。又夢入鄭文康家、移其桂歸植之。已而鼎臣生。後諡文康與鄭名全、蓋七十年餘夢始驗也。又宋有衛狀元溼、名臣也。其祠在邑中。初鼎臣入邑庠、夜夢一人紫袍象簡稱衛姓、携狀元及第篆文圖書祝之。每過其祠、虔誠謁拜。一日鄉間儒生入城、假宿于祠中、似聞神語云、明日有狀元顧鼎臣來、儒生謂庠中無此人。早起俟何人至、忽見諸生顧全入、語以此事。顧曰、吾正將易此名矣。



弘治十八年(一五〇五)殿試に臨んだ士人は董祀(字は文玉、会稽の人)等三百三人であり、顧鼎臣を第一位に選んだ。

考えるに、顧鼎臣は、字は九和、初名は全、号は未斎、崑山の人である。進士第一に挙げられた時、三十三歳であり、卒年は六十八歳であった。父恂(伝未詳)は五十歳過ぎで鼎臣を授かった。「鼎臣は」三十歳

の時から毎晩、香とお札を焚いて父の長寿を祈り、自分の寿命を親に加えてくれるよう請願した。ある日の夕方、黄色い鶴が天から飛来する夢を見た。近づいてそれを見ると燃やしたお札であった。背面に「院」という字が大書され、その後朱で書かれた批評が数行あり、その末尾に、「これより以後は、田単の火牛の計のように、滞りなく目標を突破できよう。」とあった。思うに弘治十八年科「の状元」の予兆であった。父は八十歳で我が子が状元及第するのを目の当たりにすることができた。父はかつて鼎臣「という名の者」が状元となる夢を見たので、当初、自分の孫の潜に「そう」名付けたが果たせなかった。そこで自分の末子に名付けると、その通りになった。また、「かつて」鄭文康(字は時又、号は介菴、崑山の人、正統十三年進士)の家に入りその家の桂の木を持ち帰って植える夢を見た。しばらくして鼎臣が生まれた。後の諡である文康は、鄭の名と同じであり、何と七十年余りたつて夢が「現実」と符合したのである。また、宋代に衛溼状元という名臣がおり、彼の祠が街の中にあつた。鼎臣が県学に入學したばかりの頃、夜中に「高官の着る」紫の朝服姿の衛姓を名のる者が、「状元及第」と書かれた篆文の印章を携えておりそれを「鼎臣に」くれた。「彼はそれ以降」その祠の前を通り過ぎる度に、敬虔な態度で拝調した。ある日、村里の生員が街に入って、祠中で宿を借りると、「明日、状元の顧鼎臣がやって来る。」という神の言葉が聞こえた気がしたが、その生員は「自分が通う」県学にはそういう人物はいないと思つた。朝早く起きて、誰がやってくるか待っていると、たちまち生員の顧全が入ってきたので、ことの次第を話した。顧は言つた、「私は今よりこの名に変えることにしよう。」と。

【注】①一大院字末有硃批字數行末云……お札の内容について述べているよう

であるが、この部分の解釈には疑問が残る。待考。②田單火牛……齊の田單が火牛の計で燕の名將楽毅を打ち破り、七十余城を取り返した故事。『史記』田單列伝に見られる。「牛」は「乙丑」の「丑」と同義。③衛狀元涇……錢福の条に既出。

【補説】図は、顧鼎臣が夢の中で、黄色い鶴が天から飛来するのを見ている姿。

### 狀元呂柟

正徳三年戊辰 廷試邵銳等三百四十九人、擢呂柟第一。

按、呂柟、字仲木、號逕野、陝西高陵人。未總角有志聖賢之學、不爲辭章之習。夏居矮屋衣冠危坐。雖炎日蘊隆不出戶限、嚴寒則履藉麥草、誦讀六經、夜以繼日。鄉試舉第十、會試不利、入太學。戊辰入對大廷、承法天法祖之間、以仁孝爲對、而要之於學、擢第一。賜冠服帶履、復習若固、有明日有竊政中官來賀、却之。時年三十四、卒年六十四。是夕有大星殞華陰。狀元錄事親最孝、會試聞喪、痛哭草履步至家。是時夢有人報明科狀元。其祖彬卿葬時、壙有聲如雷。卜云、兆顯六世。至是柟生、竟以道鳴於世、符卜兆云。年十四應試臨潼、貧不能僦館、宿新豐空舍。夜夢老人自驪山下謂曰、爾勉學、後當魁天下。

【校勘】「逕」は、「涇」の誤り。



正徳三年（一五〇八）殿試に臨んだ士人は邵銳（字は思抑、仁和の人）等三百四十九人であり、呂柟を第一位に選んだ。

考えるに、呂柟は、字は仲木、号は涇野、陝西高陵の人である。まだ総角の童子となる前から聖賢の学問に志し、文章の勉強はしなかった。夏でも小さな家で衣冠を整え端座した。猛暑の日であっても、戸外に出ることはなく、嚴寒の日にも麦わらを敷物にして、夜を日に繼いで、六経を誦讀した。郷試では第十位となるが、会試に合格できず、国子監に入学した。正徳三年、殿試の対策に臨み、「天に法り祖に法る」という問いを承けて、「仁孝」によって対策を書き、「結論を」学問で締めくくり、第一位に拔擢された。冠服帯履を賜っても、それまで通り学業の復習に努めた。翌日には政権を盗み取る宦官がお祝いにやって来たが、それを退けた。この時三十四歳であり、卒年は六十四歳であった。その「逝去した」夕べ、大きな星が華山の北に墜ちた。

『狀元録』大変な孝行者であり、会試の際に「親が」亡くなったのを聞くと、激しく泣きながらわら靴で歩いて家に戻った。この時、ある人が次の試験の狀元になると告げる夢を見た。かれの祖先彬卿（伝未



詳)を埋葬する時、墓穴から雷のような音がした。占いは、「その兆は六世になって明らかになる。」と言った。「その」六世になって柙が生まれ、ついに道義によって名を世に鳴り響かせ占いと符合した。十四歳の時に臨潼県で試験(童子試)を受けた際、貧しくて宿を借りることができず、「臨潼の東の」新豊県の空き家に泊まった。夜、驪山から老人がおりてきて、「お前は学業に励みなさい。後にはきつと天下第一となるであろう。」と言う夢を見た。

【注】①竊政中官……「中官」は、宦官に同じ。劉瑾あるいはその腹心の者のことであろう。②華陰……華山の北。華山は、陝西省華県の西にある山で、五岳の一つ。③状元録……『皇明歴科状元録』巻四。字句に異同は無い。

④驪山……臨潼県の南東にある山の名。秦の始皇帝陵がある。

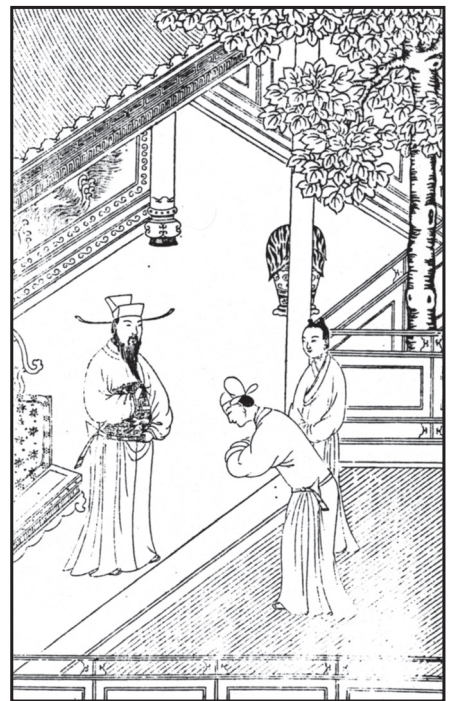
【補説】図は、茅屋に端座して勉学に励む様子を描いたものであろう。

### 状元楊慎

正徳六年辛未 廷試鄒守益等三百四十九人、擢楊慎第一。

按、楊慎、字用脩、號升菴、四川成都人。首相廷和之子。幼善文、年二十四状元及第、後以議禮不合、伏闕號哭、坐戍滇南。父卒、乞歸終制、不許。久居滇益綜群籍著作愈精、爲海内宗、風流雅致、人多稱之、今梓傳。廷和之弟廷儀、慎之弟惇、恂皆登進士。年七十卒。状元記事\*揚州一士夫偶遇樟柳神、因叩明春状元何處人。神云、川新都種裡、肅氏頭上名、喬木無灰易、眞心用脩行。慎既及第、乃知爲蜀地姓名字也。

【校勘】「揚」は、「揚」の誤り。



正徳六年(一五一一)殿試に臨んだ士人は鄒守益(字は謙之、号は東廓、安福の人)等三百四十九人であり、楊慎を第一位に選んだ。

考えるに、楊慎は、字は用脩、号は升菴、四川成都の人である。首相廷和の子である。幼い頃から文章がうまく、二十四歳で状元及第した。後に大札の議が起こった際、意見が聞き入れられず、宮殿の門に拝服して大声で泣いたため、雲南に流罪となった。父が卒したとき、帰郷して喪に服することを請うたが、許されなかった。長いこと雲南にいる間に益々多くの書籍を考究した。著作はいよいよ精密となって、天下の第一人者となり、風流な趣は、多くの人から称揚され、その著作は今に伝わっている。廷和の弟の廷儀、慎の弟の惇、恂もみな進士に登第した。七十歳あまりで卒した。

『状元記事』揚州の一人の士大夫が偶然樟柳神に出会ったので、ついでに來春の状元はこの人でしょうかと尋ねた。神は言った、「四川の新都に檉かわやなぎを植えると、肅氏の頭が及第するであろう、高木は燃えたり変化することは無い、まことの心で行いを修めよ。」と。慎が及第してから、やっと蜀の地、姓名、字であることがわかった。

【注】①首相廷和之子……楊慎は、宰相楊廷和の子であったことから、彼の及第に関しては、関節を指摘する記録が非常に多い。②議禮不合……弘治帝の子正徳帝に跡継ぎがいなかったために武宗の従弟の嘉靖帝が擁立された後、嘉靖帝の実父興献王朱祐杭の尊号をどうするかを巡って朝廷を二分して起こった論争。楊慎は、父である内閣大学士楊廷和とともに、この論争で嘉靖帝の意向に背くこととなった。③終制……三年の喪を終えること。④状元記事……未見。⑤樟柳神……旧中国で占星術師が用いた占卜の具という意味もあるが、ここでは神の名のようである。⑥川新都種裡……新都是成都府の県名。占いの言葉であろうが、この部分の読み方には不安が残る。待考。

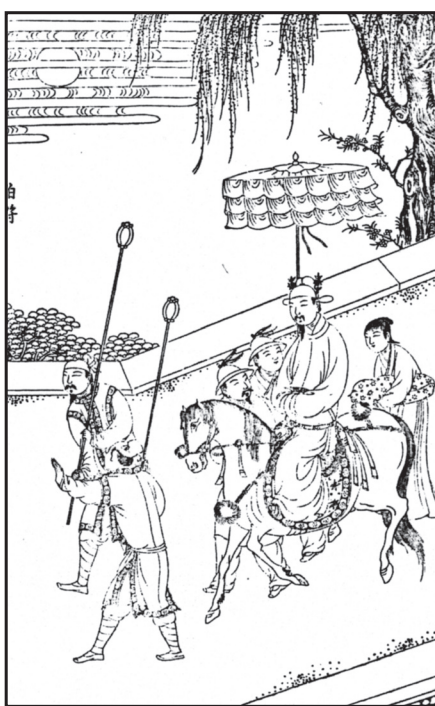
【補説】図は、宰相の父にあっている場面のようにも思えるが、どの場面を描いたものか未詳。なお、図には「仲階」の署名がある。

### 状元唐臯

正徳九年甲戌 廷試霍韜等三百九十六人、擢唐臯第一。

按、唐臯、字守之、號心菴、直隸歙縣人。素以元魁自擬、累蹶場屋。人謂曰、徽州好個唐臯哥、一氣秋闈走十科、經魁解元荷包裡、爭奈京城剪縹多、臯聞之益勵。年四十六連捷二魁及第。可謂有志者事竟成。後脩武宗實錄成、進侍講。嘗使朝鮮、尋卒於官。彭司馬澤知徽州、移學宮而新之。夜夢神語云、明日相見秀才乃状元也。至明日、有隨衆進獻上梁文者。彭覽之、大喜稱狀元才、乃臯也。爲人善謀斷。鄰郡有賊勢猖獗將入徽界。郡守求謀士、臯出設策預防、卒不爲害。狀元錄家甚貧、襟懷脫灑。爲文一揮而成、一字不加點。若中欲有所改動、寧別作一篇語、不相犯。其才性如此。又臯素有聲譽、爲上官禮重、郡守推桂長於青烏之學、相其家稱善地、所未足者、前宜濬水一道爲御階水、必登高第。因爲質其隣之地、鑿水如法。未幾、果狀元及第。世墓在葛塘、尤陰宅之佳者。

夢徵錄未第時、每夢面前列瓜鍾一對。及廷試後、有報其中探花者曰、不止此也。既而報爲榜眼、亦曰、不止此也。及臯傳、果第一。有詰其故、乃以夢告。蓋傳臯後、黃蓋瓜鍾送歸第者、狀元也。故臯自信如此。



正徳九年（一五一四）殿試に臨んだ士人は霍韜（字は渭先、南海の人）等三百九十六人であり、唐臯を第一位に選んだ。

考えるに、唐臯は、字は守之、号は心菴、直隸歙縣の人である。平素から自ら首席になると言いながら、続けざまに受験に失敗した。人々はなじって言った、「徽州のご立派な唐臯兄は、一氣に郷試を十科も駆け抜けて、經魁と解元は巾着袋の中にあつたものの、都にスリが多いのは如何ともしがたい。」と。臯はこれを耳にして一層精進した。四十六歳の時、連続して首席で及第した。志の有る者はしまいには事が成るものだと云える。後に『武宗実録』を編纂して完成すると、侍講に昇進した。かつて朝鮮に使いし、ついで官についたまま卒した。司馬の彭沢（字は濟物、長沙の人）は徽州の知府となり府学を移転して新しくした。夜夢に神が現れて言った、「明日、相見する秀才こそ状元であるぞ。」

と。翌日になって皆に従って上梁文を奉る者がいた。彭がそれを見て大いに喜び状元の才能であると言った。「それが」なんと臯であった。「臯の」人となりは謀略と決断力に秀でていた。隣郡で盗賊が荒れ狂い今にも徽州の境界に侵入しそうであった時、知府は知謀の士を求めたので、臯が出て行き策を講じて未然に防ぎ、結局被害を被ることはなかった。

『状元録』家が非常に貧しかったが、胸の内はさっぱりしていた。文を作るときにはひと揮いで書き上げ、一字も書き直すことはなかった。もし中に手直したいところがあれば、むしろ別に一篇の語を作り、先後で重複することはなかった。その才能はこのようであった。さらに臯は日頃から名声が高く知府から礼遇されていた。知府の推桂は、地相見の学に長じており、彼の家相を見て善い土地であると称賛したが、まだ足りない部分として、庭前に深い溝を一本掘って御階水をつくれば、必ずや高位及第するであろうと言った。そこでその隣の土地を交換し、決まりにしたがつて池を掘った。それからまもなくして果たして状元及第した。代々の墓は葛塘にあり、「そこは」最も理想的な墓地であった。

『夢徵録』まだ登第していない時、夢を見る度に面前に瓜錘が一對並んでいた。廷試の後になって、探花で合格したという知らせがあつても、「それにとどまらない」と言った。しばらくして、榜眼で合格したという知らせがあつても、やはり「それにとどまらない」と言った。伝臚になると果たして第一位であった。その理由を問いたすと、夢のことを話した。つまり、伝臚の後に、黄色い傘と瓜錘によって邸宅に帰るのを送ってもらう者は、状元である。だから臯はこうなると信じていたのである。

【注】①経魁……郷試・会試の第五名までは、「五経」各経の選択者から各一名ずつ取るようになっており、これを「五経魁」と呼ぶ。②二魁……ここでは、郷試と殿試で首席になったことを言うのであろう。③状元録……『皇

明歴科状元録』巻四。字句に異同は無い。④青鳥之學……「青鳥」とは、

もともと中国古代の伝説上の風水師である青鳥子のこと。後世、風水師のことを青鳥と呼ぶようになった。なお、ここの風水の内容はよくわからない。⑤

夢徵録……未見。⑥瓜錘……図の中で先導者が持っている道具のことであろう。⑦黄蓋瓜錘送歸第者……『正徳九年進士登科録』は未見であるが、『正

徳六年進士登科録』(天一閣明代科挙録選刊)の「恩榮次第」によれば、伝臚の後で状元が邸宅に送られる様子は、以下の通り。「三月十八日早、文武百官朝服侍班、是日錦衣衛設鹵簿于丹陛丹墀内、上御奉天殿、鴻臚寺官傳制唱名、禮部官捧黄榜、鼓樂導引出長安左門外、張掛、畢、順天府官用傘蓋儀從送状元歸第。」

【補説】図は、『夢徵録』に言う夢の中の様子を描いたものであろう。図には「伯符」の署名がある。

### 状元舒芬

正徳十二年丁丑 廷試、倫以訓等三百四十九人、擢舒芬第一。

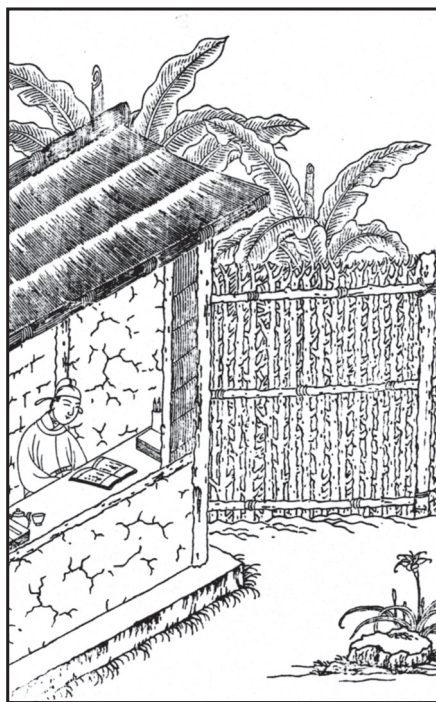
按、舒芬、字國裳、號梓溪、江西進賢人。幼即岐嶷穎異。甫成童、入郡學。嘗作赤鴈賦、郡守奇其才、謂當魁天下。家貧清苦、不與人群。雖書無所不讀、寔勵志聖賢之學、端居終日、夜必計過自訟。丁丑 賜状元及第、時年三十四。乙酉扶母喪歸卒。年四十四。

義命註編聞人劉世揚、會試入京、夢神告之曰、今年状元名國裳。世揚即以國裳易之。劉是科登進士、而状元舒芬、其字則國裳也。事有定數、惟鬼神能知之。芬未第時、至九鯉湖註祈夢、五夜無夢。因題詩云、千里尋眞意亦虔、五宵無夢竟無緣、神仙不識人間事、歸去揮毫作状元。註到山下遇

一老人問、公何夢、公告之故且述其詩、老人爲改云、千里尋眞未是虔、



五宵無夢豈無緣、神仙不洩人間事、歸去揮毫作狀元<sup>注5</sup>。因忽不見、蓋仙化爲老人以告公也。 狀元錄<sup>注6</sup>蕭御史鳴鳳精於星命。丁丑 廷試、或以八字雜質之曰、孰爲狀元。蕭指芬八字曰、此是也。果然。後復以後事實於蕭、答曰、功名壽數、始終皆羅一峰。舒夔然曰、止此乎。曰、忠孝狀元足矣。後果謫壽亦止此。今配享一峰祠。



正徳十二年（一五一七）殿試に臨んだ士人は倫以訓（既出）等三百四十九人であり、舒芬を第一位に選んだ。

考えるに、舒芬は、字は国裳、号は梓溪、江西進賢の人である。幼少の時から才知が人並み優れぬきんでいた。成長するとすぐに、府学に入學した。かつて「赤鴈賦」を作ると、知府はその才能を高く評価し、きつと天下第一となるであろうと言った。家は貧しく清廉で苦しい生活ぶりであったが、人と群れることはなかった。あらゆる書物を読破し、聖賢の学に志して誠実に励み、一日中礼儀正しく坐って、夜には必ず過ちを数えて自らを責めた。正徳十二年状元及第を賜った。この時、三十四歳であった。嘉靖四年（一五二五）母の柩を守って帰郷したまま

卒した。年は四十四歳であった。

『義命編』閩県の人劉世揚（字は実夫）は会試のため京師に入ると、夢の中で神が彼に告げて言った、「今年の状元の名は国裳であるぞ。」と。世揚はすぐに国裳という名に変えた。劉はこの科で進士に及第したが、状元は舒芬であり、彼の字がつまり国裳なのであった。事には決まった定めがあり、鬼神だけが知ることができるのである。芬がまだ及第していない時、九鯉湖に行つて夢に祈ろうとしたら、五晩も夢を見なかった。そこで詩を作つて言った、「千里も真をたずねたのはその気がかり敬虔だからである。五宵も夢を見ることが無いのは結局縁が無いのである。神仙は人間世界の事がわからないのだから、帰つて筆を揮えば状元となるであろう」と。山の麓に着くと一人の老人がたずねた、「あなたはこういう夢を見たのかな。」と。公はあつたことを説明し、また作つた詩について話した、老人は「詩句を」改めて言った、「千里も真をたずねたからといってまだ敬虔とは言えない。五晩も夢を見なかったのがどうして縁がないからであろうか。神仙は人間世界の事を洩らしたりはしないから、帰つて筆を揮えば状元となるであろう」と。「そう言ふと」たちまち姿が見えなくなったといふことは、つまり仙人が老人に化して公に告げたのである。

『状元録』御史の蕭鳴鳳（字は子雛、山陰の人、正徳九年進士）は占星術に詳しかった。正徳十二年の廷試の際、ある人が八字を適当にまぜて、「誰が状元になりますか。」と質問した。蕭は芬の八字を指して言った、「この者である。」と。果たしてその通りであった。後に再び将来のことを蕭に質問すると、答えて言った、「功名と寿命は一貫して、すべて羅一峰（名は倫、既出）である。」と。舒は驚いて言った、「それにとどまりますか。」と。「蕭は」言つた、「忠孝の状元であれば十分である

う。」と。後果たして左遷の運命も寿命もこれ(羅と同じ)にとどまった。今、一峰の祠廟に合わせ祀られている。

【注】①成章……其の二「施槃」の項注②参照。②義命編……未見。『皇明

歴科状元録』巻四に見える話では、「世揚即以國裳易之」が、「世揚即以國裳易己之字」になっている。

③九鯉湖……福建興化府仙遊県にあった湖。

④千里尋真意亦度……(訓読)「千里に真を尋ぬるは意亦た度なり、五宵も夢みる無きは竟に縁無からん、神仙は人間の事を識らず、帰り去きて揮毫すれば状元と作らん」

⑤千里尋真未是度……(訓読)「千里に真を尋ぬるも未だ是れ度ならず、五宵も夢みる無きも豈に縁無からん、神仙は人間の事を洩らさず、帰り去きて揮毫すれば状元と作らん」

⑥状元録……『皇明歴科状元録』

巻四。字句に異同は無い。

⑦八字……生まれた年、月、日、時の干支を八字で表したものを。占いに使われる。

【補説】図は、貧しい茅屋で端座して日々読書に励む様子を描いたものである。

### 状元楊維聰

正徳十五年庚辰會試取中張治等三百五十人。會毅皇帝狩於南京、未及

廷試、至十六年辛巳、嘉靖登極、始舉之時、廷對之士三百三十三

人、擢楊維聰第一。實嘉靖龍飛第一科、勵政求賢之始云。

按、楊維聰、字達甫、號方城、順天固安人、年三十。登鄉薦第一。狀

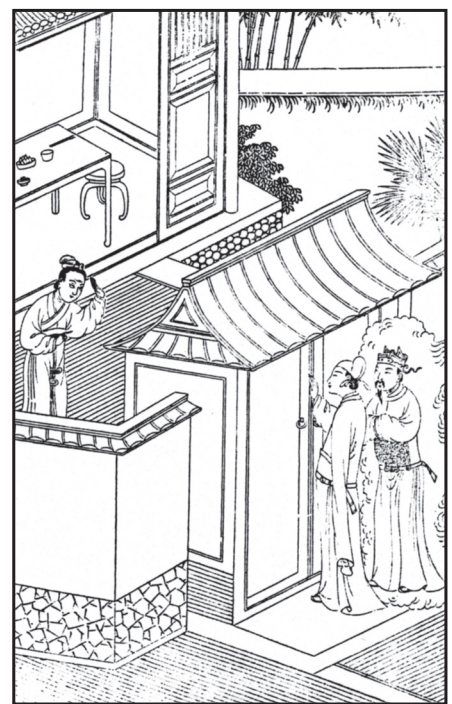
元記事幼隨父和任長史。在塾讀書、每膳具維聰已至、母張氏問其何故知

之、答曰、恒聞耳邊呼曰、状元可食飯。及長、在京夢崇文坊迎金字辛巳

状元牌來、扣之何往、曰、送與固安楊秀才。覺而自喜、但疑是歲非試

期。既而已卯、庚辰鄉會連捷。因武帝南巡、未暇廷試、至今上登

極、舉之、實辛巳歲也。兄維傑、亦治詩以嘉靖己丑、登進士第二人。



正徳十五年(一五二〇) 会試では張治(字は文邦、茶陵の人)等三百五十人を及第させた。たまたま毅皇帝(武宗正徳帝)が南京に狩獵に出かけていたため、廷試が行われないうまま、翌十六年となり、「正徳帝の崩御をうけ」嘉靖帝が即位し初めて科挙を行ったこの時、廷試に臨んだ士人は三百三十三人で、楊維聰を第一位に選んだ。「これぞ」実に嘉靖帝が帝位についての第一科であり、政に励み賢臣を求めた「治世」最初の科であった。

考えるに、楊維聰は、字は達甫、号は方城、順天固安の人である。三十歳であった。「順天府」郷試でも第一位となった。

『状元記事』幼い時、父の和(伝未詳)が長史に任ぜられたのに従った。塾で勉強をしていますが、食事の準備が調うといつも維聰が帰ってくるので、母張氏が「どうしてわかるの。」とたずねると、答えて言った、「常に耳元で『状元よ、ご飯を食べなさい。』という声が聞こえるのです。」と。大きくなって、京師で見た夢の中で、崇文坊で金字で書かれた「辛巳状元」の牌が来るのを迎えた際、どこに行くのか聞くと、「固安の楊秀才に送り届けるのです。」という答えであった。目を覚まして

一人で喜んだものの、この年は試験の年ではないのにと不思議に思った。しばらくたって正徳十四年、十五年と、郷試と会試に連続して合格した。武宗は南巡して、廷試を行う時間がなく、「そのまま崩御し」今上皇帝が即位するに至って殿試が挙行されたのは、実に辛巳の年のことであった。兄維傑も、やはり『詩経』を修めて嘉靖八年（一五二九）科で、進士第二位で及第した。

【注】①毅皇帝狩於南京……この年、正徳帝は南京に出御して戻らず、結局殿試は挙行されないままで、翌年、嘉靖帝の即位を待つて行われるという異例の事態となった。

②三百三十三人……『正徳十六年進士登科録』（明代登科録彙編）によると、この科の進士は三百三十人である。

③龍飛……天子が位に即くこと。

④狀元記事……未見。

⑤崇文坊……京師の崇文門あたりの街の名。

⑥狀元牌……狀元及第を記念する扁額のことであろう。

⑦嘉靖己丑……丙戌の誤りである。

【補説】図は、『狀元記事』に基づき、母親が食事の準備をしたところ、維傑が塾から帰ってきた様子を描いたものであろう。

### 卷三

#### 狀元姚涑

嘉靖二年癸未 廷試李舜臣等三百一十人、擢姚涑第一。

按姚涑、字惟東、號明山、浙江慈谿人、工部侍郎鑲之子。幼資魯。一日

苦讀、有一女國色翩然曰、苦讀何爲、授以玉髓丸曰、助君掇高科。初赴

會試、出江遇蟹舡相觸有聲。涑問故、家人答曰、斷船搖來撞頭。衆聞之

謂、語讖之佳、相賀。吳音以斷然姚涑狀頭。果大魁。年三十六及第、

脩撰、丁酉主順天鄉試、尋卒。



嘉靖二年（一五二三）殿試に臨んだ士人は李舜臣（字は茂欽、号は愚谷、未村居士、楽安の人）等三百十人であり、姚涑を第一位に選んだ。

考えるに、姚涑は、字は惟東、号は明山、浙江慈谿の人で、工部侍郎鑲（字は東泉、弘治六年進士）の子である。幼い時は資質が魯鈍であった。ある日苦勞しながら読書をしていると、一人の絶世の美女がひらりと現れて、「苦しんで読書をして何になるのですか。」と言い、玉髓丸を授けてくれた。「あなたが高位及第を拾い上げるのを手伝いましょう。」と。初めて会試に赴いた際、長江に出ると、蟹船が互いにつかり合つて音を出しているのに遭遇した。涑が理由をたずねると、家人は答えて言った、「漁船が揺れながらぶつかっているのだ。」と。人々はそれを聞いて、「好ましい予言を語ったものだ。」と言い、喜び合った。「断船揺來撞頭」とは「呉の方言では、「明らかに姚涑が狀元である。」の意」だからであった。果たして大魁となった。

三十六歳の時に及第して修撰となり、嘉靖十六年（一五三七）順天府郷試の主考官を務め、ついで卒した。



【注】①三百一十人……『嘉靖二年進士登科録』(天一閣明代科挙録選刊)によると、この科の進士は四百十名であった。②玉髓丸……仙薬の一種である。③蟹缸……蟹を捕る船なのか、あるいはその形状による名なのか未詳。④斷船……「斷」は「斷」(河川の流れの中にさして魚や蟹などの進行を遮る柵状の漁具)の意でとった。

【補説】図は、絶世の美女から玉髓丸を授かる場面。

狀元龔用卿

嘉靖五年丙戌 廷試趙時春等三百一人、擢龔用卿第一。

按、用卿、字鳴治、福建懷安人、治禮記、年二十六、登第。福州舊傳郭璞遷城記云、南臺沙合河口路通、先出狀元、後出相公。至是、用卿首選。百夢集臨試時、嘗夢龍神寫狀字於頭上、果中狀頭。是科革龔寅緣之弊、用卿拔自會榜之末。



嘉靖五年(一五二六)殿試に臨んだ士人は趙時春(字は景仁、号は浚谷、平涼の人)等三百一人であり、龔用卿を第一位に選んだ。

考えるに、用卿は、字は鳴治、福建懷安の人である。『礼記』を修め、二十六歳で登第した。福州の古い言い伝えでは、郭璞の『遷城記』に、「南台の沙が河口をふさいで路が通じれば、まず狀元が出て、後には宰相が出る。」とあったと言う。この時になって用卿が首席となった。『百夢集』かつて試験に臨んだ時、龍神が頭の上に「狀」という字を書いてくれる夢を見、果たして狀元で合格した。

この科では受験生が高官にすがって出世を求める弊害が改められ、用卿は会試の低位から抜擢された。

【注】①郭璞遷城記……この話は幾つかの文献に見られるが、例えば『皇明歴科狀元録』巻四に引く『閩中記』には「晉郭璞遷城時言……」になっている。②百夢集……未見。③寅緣之弊……頭官が意中の受験生を特別に引き立てたり、受験生が頭官の權威にすがろうとする宿弊のことを言うであろう。『皇明登科考』巻十一には、「先是、廷試納卷之時、彌封官以會試前列數卷潛送内閣、以備一甲之選。或内閣密覘狀頭儀貌、及平昔聲望。問有因而爲奸者。且閱卷官、出自東閣、歸宿私第。卷未入御覽、而消息先播於外。是年禮部尚書席書歷疏其弊、請令彌封官不得與送卷、閱卷官退朝直宿禮部。上從之。嗣是少龔緣之奸、而一甲三人往往拔自後列、不可注擬矣。」という興味深い指摘が見られる。④會榜之末……龔用卿の会試及第順位は未詳。

【補説】図は、『百夢集』の内容を描いたものであろう。

狀元羅洪先

嘉靖八年己丑 廷試唐順之等三百二十三入、擢羅洪先第一。上方勵精、求賢益親文學之士。大學士楊一清等、以洪先輩六卷進覽、上一一品題、有批語于洪先曰、學正有見、言讜而意必忠。※擢之首者。

按、羅洪先、字達夫、號念菴、江西吉水人。年二十六、父循、官副使、母有賢行、宦居而荆布<sup>註3</sup>、勉夫子以廉。父見一寺有棺七口、命僧以俸金瘞於寺側。及得一子、即號曰、念菴。言一念之善也。后魁天下、人以爲陰報云。

【校勘】「宜」の字を補うべきである。



嘉靖八年（一五二九）殿試に臨んだ士人は唐順之（字は応徳、号は荆川、武進の人）等三百二十三人であり、羅洪先を第一位に選んだ。皇帝はまさに「政務に」務めて、賢者を求め益々文学の士に親しもうとしていた。大学士楊一清（字は応寧、安寧の人）等は、洪先ら六人の試卷を御覽に進呈すると、皇帝は優劣高下をつけた。洪先「の試卷に」対する批語には、「学問には見識があり、言葉は正しくその意は必ずやまことである。これを首席に抜擢せよ。」とあった。

考えるに、羅洪先は、字は達夫、号は念菴、江西吉水の人である。年二十六歳であった。父の循（字は遵道、吉水の人、弘治十二年進士）は官は副使であった。母は德行に優れており、官僚の家にあつて質素な服

装をし清廉な態度で夫を励ました。父親はある寺に棺が七つ「放置された状態」あるのを見て、僧侶に命じて「自らの」俸禄を用いて寺の側に埋葬させた。一子を授かった時には、すぐに念菴という号をつけた。一念の善という意味である。後に「その子が」天下第一となると、人々は陰徳に対する報いだと思つた。

【注】①大學士楊一清等……この科の読卷官は、吏部尚書華蓋殿大學士の楊一清以下十八名であった。②上一一品題、有批語……『嘉靖八年進士登科録』（天一閣明代科舉録選刊）には、第一甲三名（羅洪先、程文徳、楊名）、及び第二甲の上位三名（唐順之、陳東、任瀚）の対策が程文として掲載され、それぞれに皇帝の御批が冠されている。③荆布……「荆釵布裙」の略。にんじんほくの枝のかんざしと布の裙のことで、女性の質素な服装を言う。

【補説】図は父の循が僧に依頼して功德を施す様子。

### 狀元林大欽

嘉靖十一年壬辰 廷試林春等三百一十六人、擢林大欽第一。

按林大欽、字敬夫、號東蒲、廣東潮州海陽人。年二十二及第授脩撰、以疾告歸、未久卒。田汝成記是歲、禮部尚書夏言知貢舉<sup>註2</sup>上言、舉子經義論策、各有程式。邇來文體怪異、舊格屢更。請令今歲、凡騁詞浮誕、以壞文體者、擯不得取。上從之。會試既畢、夏公召予語曰、進士答策、亦有成式。可論諸生、毋立異也。予曰、唯。因諸舉子領卷<sup>註1</sup>、傳示如前。諸舉子皆曰、唯。既 廷試、內閣取定二卷<sup>註5</sup>。都御史汪公鋌得一卷、大詫曰、怪哉。安有答策無冒語者。大學士張孚敬取閱一過、曰、是雖破格、然文字明快、可備 御覽。遂附前二卷封進。上覽之、擢無策冒者第一。啓之、乃林大欽也。夏公大駭、謂予、何不傳論前語。予無以自解、

就大欽詢之、對曰、某不聞此言。聞之、安敢違也。予乃檢散卷簿、大欽是日不至、次日乃領之。因嘆榮進有數、非人所能沮也。 狀元全考注⑤自幼聰穎、作文奇宕不群、翁萬達一見異之、請招爲婿。岳誕日大欽書聯一對賀曰、天增歲月人增壽、春滿乾坤福滿堂。注⑩ 語意宏敞、翁曰、狀元才也。大欽祖父葬地有古識注⑫云、五鳳山頭未爲貴、鷓鴣飛去狀元來、其山未向對鷓鴣、山甚凶、人不敢葬。又念鷓鴣安得飛去。欽祖父依古識葬之。是夜雷雨大作、其山果崩、若飛去然。其父乃生大欽中狀元。



嘉靖十一年(一五三二)殿試に臨んだ士人は林春(字は子仁、福清の人)等三百十六人であり、林大欽を第一位に選んだ。

考えるに、大欽は、字は敬夫、号は東蒲、広東潮州の海陽の人である。二十二歳で進士に及第し修撰を授かるが、病を理由に帰郷し、まもなく卒した。

『田汝成記』この年は、礼部尚書夏言(字は公謹、貴溪の人)が知貢掾であり、上奏して言った、「挙子の経義、論、策には、それぞれ程式がございます。近頃、文体は奇矯になり、旧来の決まりは度々変えられ

ております。どうか今年より、好き勝手に軽薄な文章を書き、文体を壊す輩は、すべて斥けてお取りになりませぬように。」と。皇帝はそれに従った。会試がすでに終わると、夏公はまた私を呼んで言った、「進士の対策には、やはり決まったかたちがある。諸生に論して、異を立てさせてはならぬ。」と。私は言った、「承知致しました。」と。挙子が「答案用紙を」受領する際に、それと同じように伝えた。挙子はみな、「承知しました。」と答えた。廷試が終わると、内閣は「第一甲に」二巻の答案を取ることに決めた。都御史の汪鋹(字は宣之、婺源の人、弘治十五年進士)は「さらに」ある答案を手にとると、大いに驚いて言った、「おかしいぞ。どうして対策に冒語が無いなんてことがあるのか。」と。大学士張孚敬(初名は聰、字は秉用、永嘉の人、正徳十六年進士)は手にとりてざっと目を通して言った、「これは破格ではあるが、しかし文章は明快であり、御覽に供するに足る。」と。かくて前の二つの答案に附して進呈した。皇帝はこれを御覽になると、対策に冒語が無い者を第一位に抜擢した。その答案の封を開くと、なんと林大欽であった。夏公はびっくりして、私に言った、「どうして先の言葉を伝えて論さなかったのだ。」と。私は自分では弁解できなかったもので、大欽に尋ねると、「彼は」答えて言った、「私はその言葉を聞いておりません。それを聞いていたら、どうして違うことがありますか。」と。私がそこで「散巻簿」を調べると、大欽はこの日は来ておらず、次の日に「答案用紙」を受領していた。そこで「私は」榮進には運命というものがあり、人が阻むことができるものではない、と嘆じた。

『状元全考』幼い時から聡明で、文章を作ると新鮮で抑揚に富んでおり、翁万達(字は仁夫、掲陽の人、嘉靖五年進士)は一見して彼が特別な才能であると見抜き、娘婿に招いた。岳父の誕生日に、大欽は対聯を



一對書いて祝して言った、「天は歳月を増し人は寿命を増す、春は天地に満ちて福は堂に満ちる」と。一語一語の趣向がかりとしており、翁は「状元の才能である。」と言った。大欽の祖父の葬られた土地には古い識があり、「五鳳山頭はまだ高貴ではないが、鷓鴣が飛び去れば状元が来るであろう。」とされていた。その山ではまだ鷓鴣を見たことはなく、非常に不吉であるので、人々は敢えて葬ろうとはしなかった。さらに、鷓鴣「のような鳥」がどうして飛び去るはざらあろうかと思っていた。「しかし」欽の祖父は古識に依拠してここに葬られた。その夜雷雨が大いに起こり、その山は果たして飛び去るかのよう崩落した。なんと、その父が授かった大欽が状元になったのである。

【注】①田汝成記……田汝成はこの時、礼部儀制清吏司署郎中事主事で、印巻官の三名の筆頭であった。②禮部尚書夏言知貢舉……会試の知貢舉官は、礼部尚書と侍郎が務めた。当時の礼部尚書は夏言であった。なお、夏言の上奏は、『南宮奏稿』巻一「正文体重程式簡考官以収真才疏」に見える。③夏公召予……夏言は、殿試においては提調官三名の筆頭であった。④領巻……殿試を受験する貢士は、あらかじめ礼部に赴き、試巻に押印してもらう必要があった。⑤内閣取定二巻……内閣官は読巻を終えたあと、第一甲三名の候補を選び、その対策を皇帝に進読した。『正徳』明会典』巻七十七「礼部三十六・学校二・科挙・殿試事例」に、「明日（今用殿試後二日）、讀卷官俱詣御前叩頭跪。内閣官以取定第一甲三名試巻進讀。讀訖、御筆親定三名次第。讀卷官、俱叩頭。」という。⑥都御史汪公鋹……読巻官十七名の内の一人。官は都察院右都御史掌院事で、席次は第五。⑦冒語……殿試の対策の冒頭に置かれた決まった書式。⑧大學士張孚敬……吏部尚書兼華蓋殿大學士で、首席読巻官。⑨檢散卷簿……恐らく、礼部で殿試受験用の試巻に押印した際の記録簿のことであろう。錢福の条の注②参照。⑩狀元全考……未見。⑪天増歲月人增壽……（訓読）「天は歲月を増し人は壽を増す、春は乾坤に満ち福

は堂に満つ」⑫古識……識の内容がよく理解できない。待考。

【補説】図は、どの場面であるかわからない。あるいは、礼部で試巻を受領する場面であろうか。象の絵についても文章とは直接の関係はないように思う。

### 狀元韓應龍

嘉靖十四年乙未 廷試許穀等三百二十五人、擢韓應龍第一。

按、韓應龍、字汝化、浙江餘姚人。年三十八、官脩撰、未期年卒。狀

元錄<sup>註</sup>應龍在庠、爲邑令丘養浩所奇、久不偶。至同邑陳讓解元作推於紹興、養浩數以應龍語之。甲午、應龍不錄于有司。及府考、陳讓操柄、收

應龍考之。及折卷、首卷即應龍、遂爲相知、果連登第。聖上 廷試策

題皆出 宸裏、不假臣下之手。是歲試題、欲以法天法祖立意、惟輔臣知

之。宗伯夏言、行殿廊徧觀諸進士策冒。至應龍、見其冒云、人君所以致

天下之治者、法天而已矣。所以保天下之治者、法祖而已矣。乃發一笑謂

之曰、可用心做進呈。果第一。應龍舉鄉薦、有司以禮賀、有荔子圓眼偶

遺於地者、數日發生成樹矣。時皆異之。義命編<sup>註</sup>應龍家甚貧、樂飲酒。

一日過親戚家、大醉。離家數里、昏夜步歸、將臨危橋、見前有二燈照

之、行且云、送狀元。將抵家、忽不見。中第後、官京師、早起將赴

朝、坐于廳事、忽逝。

【校勘】「折」は、「拆」の誤り。



嘉靖十四年(一五三五)殿試に臨んだ士人は許穀(字は仲貽、上元の  
人)等三百二十五人であり、韓応龍を第一位に選んだ。

考えるに、韓応龍は、字は汝化、浙江餘姚の人である。年は三十八  
で、修撰となつて、一年もたたずに卒した。

『状元録』応龍は「儒学に」在学中は、知県の丘養浩(字は以義、晋  
江の人、正徳六年進士)に才能を評価されたが、長いこと不遇であつ  
た。同郷の解元陳讓(字は以礼、嘉靖十一年進士)が「餘姚県から」紹  
興府へと「生員の」推挙を求めると、養浩は度々応龍のことを彼に語つ  
た。嘉靖十三年、応龍は役人から「県試では」合格者の列に加えてもら  
えなかつたが、府考では陳讓が権力を握つており応龍を参加させて試験  
した。答案の封を開くと、首席の答案は応龍のものであり、かくて「陳  
讓からその才能を」見いだされ、「その後は」果たして連続して登第し  
た。皇帝は、廷試の制策を自ら出題し、臣下の手を借りることはなかつ  
た。この年の出題は、「天を手本とし祖法を手本とする」という主旨で  
考えられたものであり、宰相だけがこれ(その内容)を知っていた。礼  
部尚書の夏言は、「殿試の試験が行われている」宮殿の廊下を歩きなが

ら諸進士の対策の冒頭部分を遍く見て回つた。応龍のところまで来てそ  
の冒頭を見ると、「人君が天下を治まった状態に整えようとするならば、  
天ののつとるだけである。天下の政治を安らかにしようとするならば、  
祖法にのつとるだけである。」と書いていた。そこで一笑して彼に言つ  
た、「用心して作文して進呈するがよい。」と。果たして、第一位となつ  
た。応龍が郷試に挙げられると役人は礼物を持ってお祝いに訪れ、「そ  
の礼物には」荔枝と龍眼が入っており「その中から」偶々地面に落ちた  
ものが、数日して芽を出して立派な樹になった。時人は皆これを不思議  
に思つた。

『義命編』応龍は家が非常に貧しかったが、酒を飲むことを楽しみと  
した。ある日、親戚の家を訪ねた時、大いに酔っぱらつた。「親戚の家  
から」数里離れたところを、暗い夜道を歩いて帰る途中、危険な橋にさ  
しかかろうとすると、前方で二つの灯火が行く手を照らしてくれ、か  
つ、「状元を送ろう。」という声があつた。もうすぐ家に着くというところ  
で「灯火は」急に見えなくなつた。及第の後、京師で官職に就き朝廷に  
出仕し、いざ政治に与ろうという時に急逝した。

【注】①状元録……『皇明歴科状元録』卷四。字句の省略等、若干の異同はあ  
るが文意に影響はない。②作推於紹興……郷試参加者を選抜する前段階の  
科試の参加者を選抜する過程で、知府が知県に成績優秀な生員の推薦を求めた  
ことを言うのであろうか。③府考……ここでは、科試に参加する生員を、  
まず県で選抜し、ついで府で選抜した際の、府考を言うようである。④聖  
上廷試策題皆出宸裏不假臣下之手……なお、この科の進士対策は、通常の第一  
甲の三名に加え、第二甲の九名のをあわせ、上位十二人のものが御批を冠  
して「登科録」に程文として掲載されている。また、程文の前には嘉靖帝が読  
巻官にあてて書いた上論も掲載されており、極めて異例の体裁になっている。

『嘉靖十四年進士登科録』（天一閣明代科挙録選刊）参照。⑤是歲試題……『嘉靖十四年進士登科録』参照。⑥宗伯夏言……この時、礼部尚書翰林院學士で、提調官三名の筆頭であった。⑦人君所以致天下之治者……『嘉靖十四年進士登科録』参照。⑧義命編……未見。

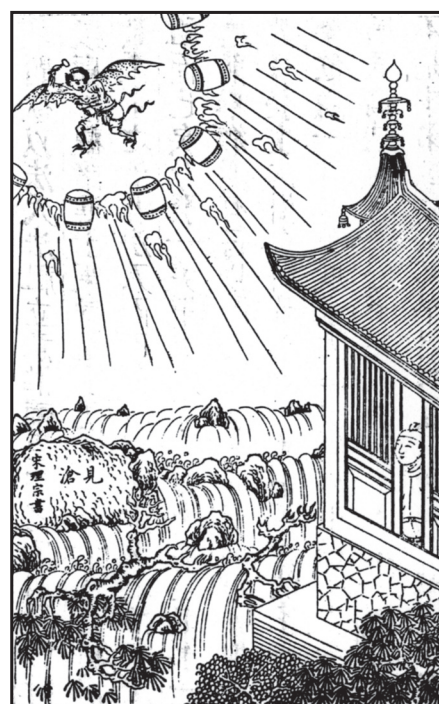
【補説】図は、『義命編』の内容に基づき、鬼がたいまつを灯して酔って帰る韓応龍を家まで送る様子を描いたもの。

### 狀元茅瓚

嘉靖十四年戊戌 廷試袁煒等三百二十人。擢茅瓚第一。

按、茅瓚、字邦猷、號見滄、浙江錢塘人。少有氣節。嘗讀書於寶覺寺、借山巔舊屋居之、始至夜雷雨大作岫崩、自謂此身莫知所向矣。詰明起視之、屋右崩岫數十丈、獨所居儼然無恙。巖端露出石刻見滄二大字云、是宋理宗所書、乃其前所取號也。中時、家中一厨碗俱有露、如雷一聲碎者居半。人皆曰、必有奇禍。俄而狀元報至。未知果何謂也。年三十及第授脩撰、甲辰同考會試。以總裁闕一人奉 旨撰後序。登第纔六年縉紳榮之。

【校勘】「四」は、「七」の誤り。



嘉靖十七年（一五三八）殿試に臨んだ士人は袁煒（字は懋中、慈谿の人）等三百二十人であり、茅瓚を第一位に選んだ。

考えるに、茅瓚は、字は邦猷、号は見滄、浙江錢塘の人である。幼い頃から気節があった。かつて宝覺寺で読書をした時、山頂の旧屋を借りてそこに住まうことにした。「ところが」最初の夜に、激しい雷雨がおこって崖が崩れたため、どこへも避難のしようがないと思った。翌朝起きてその現場を見ると、建物の右の崖が数十丈にわたって崩れていたが、「自分が」居る場所だけが整然として無事であった。巖のはしの方には「見滄」という大きな二字の石刻が現れ、「傍らに」「これは宋の理宗が書いたものである」と刻まれていた。これ（見滄）は先に自らの号とした名称であった。合格した時、家の中で厨房中の茶碗がすべて結露し、雷のような音がしたとたんその半ばが砕けるということがあり、人々はみな言った、「きつと思いがけない災難があるであろう。」と。しばらくして状元の知らせが届いた。いったいどうしたことだったのかよくわからない。三十歳で及第し修撰を授かり、嘉靖二十三年会試の同考官を務めた。「この時」主考官の一人を欠いたため聖旨をうけたまわっ



て「会試録」の「後序」を執筆した。登第からわずか六年目のことであり、士大夫たちは名誉なことだとたまたえた。

【注】①寶覺寺……杭州にあった寺の名。

②宋理宗……南宋の第五代皇帝。

③總裁闕一人奉旨撰後序……この年の会試は礼部尚書兼翰林院学士張潮(内江の人)と左春坊左庶子江汝璧(貴溪の人)が主考試官に任命されたが、この時、張潮は貢院に入つて第三場が終わると病のため死亡している。

【補説】図は、宝覺寺で雷雨がおこつて崖が崩れ、「見滄」の石刻が現れた場面。

### 状元沈坤

嘉靖二十年辛丑 廷試林樹聲等二百九十八人、擢沈坤第一。

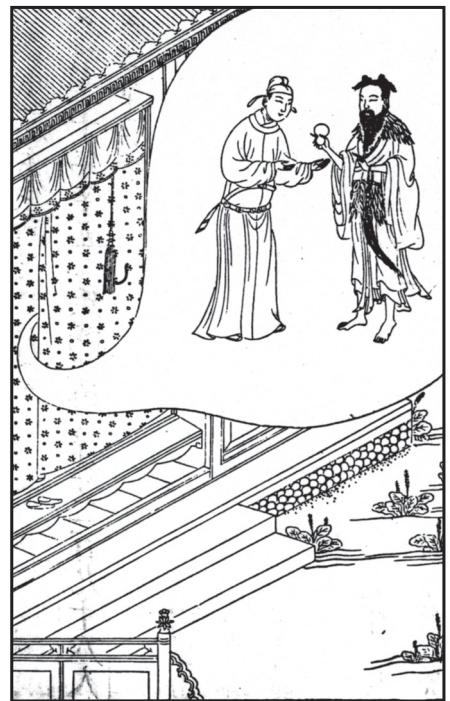
按、沈坤、字伯載、號十洲、直隸太河人。系出崑山。崑山、自衛涇至坤、状元凡五出矣。辛卯南畿鄉試、與李春芳同榜。後丁未春芳亦登状元。一榜二殿元、罕有並者。是年三十五。廷對郊廟之制詳雅擢第一。

状元奇異編嘗夢仙以藥丸食之、醒若胸中有物、而一室異香撲鼻。状元錄淮安一郡自古未有魁天下者、有之自坤始。後十九年、清河丁士美繼之。

一時鼎元相接、淮水擁秀、茲其期乎。後丁外艱于家服闋、未赴京、銓曹擬注司成以待之。因事遂困囹圄之厄、士論惜之。先是、童謠云、新状元入朝、舊状元入獄。士美登科、坤被論、果在己未之歲。榮辱禍福事皆前定、豈人所能趨避乎。

是科兄弟同科者、杭州沈洪範、洪濛、宜興萬士亨、士和、餘姚宋大勺、大武、陳陞、陳墀、皆同胞也。豈不盛哉。餘姚一縣二姓一時四進士、豈不尤異乎。

【校勘】「陞」は、「陞」の誤り。



嘉靖二十年(一五四一)殿試に臨んだ士人は林樹聲(字は与吉、嘉定の人)等二百九十八人であり、沈坤を第一位に選んだ。

考えるに、沈坤は、字は伯載、号は十洲、直隸太河の人であるが、その家系は崑山の出である。崑山は衛涇から坤に至るまで、全部で五人の状元を出している。嘉靖十年の応天府郷試では、李春芳(嘉靖二十六年の条参照)と同年であった。その後の嘉靖二十六年、春芳もまた状元で登第した。一度の郷試で二人の状元が出るのは、滅多に無いことであった。この年三十五歳であった。郊廟の制度について書いた殿試の対策は詳細かつ典雅で、第一位に拔擢された。

『状元奇異編』かつて仙人が薬丸を食べさせてくれる夢を見、目が覚めると、胸中に何かがある感じがし、部屋の中では不思議な香りが鼻をついた。

『状元録』淮安郡は昔から状元を出しておらず、坤が最初の状元であった。後、十九年して清河の丁士美(字は邦彦)がそれに続いた。同じ時期に科挙の首席が相続いたので、淮水「一带に」は秀才が集まること、ここから期待されるようになったのである。後に丁は父親を亡く

して郷里で喪に服し、終わると、まだ京師に赴く前に、吏部の長官は司成の職を与える準備をして待っていた。「しかし」ある事件により牢獄に入れられるという災厄に遭い、士人達は彼のことを惜しんだ。それに先だって、童謡に、「新らしい状元が入朝すると、古い状元は入獄する」と歌われていた。士美が登第して、坤が罪を論じられたのは、果たして嘉靖三十八年のことであった。榮辱と禍福の事柄は全てあらかじめ定まっているのであり、どうして人が避けて逃げることできょうか。

この科で兄弟ともに及第した者は、杭州の沈洪範（字は錫卿）、洪濛（字は元卿）、宜興の万士亨（字は思通）、士和（字は思節）、餘姚の宋大勺（字は道成）、大武（字は文成）、陳陞（字は晋甫）、陳墀（字は宜甫）らであり、全て同腹であった。なんたる盛事であろう。餘姚一県で、二姓が同時に四人の進士を出したのは、極めて珍しいことではなからうか。

【注】①崑山自衛涇至坤狀元凡五出矣……五人とは、宋の衛涇、明の毛澄（弘治六年）、朱希周（同九年）、顧鼎臣（弘治十八年）、そして沈坤である。②廷對郊廟之制……制策、对策ともに『嘉靖二十年進士登科録』（天一閣明代科挙録選刊）参照。③狀元奇異編……未見。④狀元録……『皇明歷科狀元録』巻四。「茲其期乎」と「後丁外艱」の間にかのりの省略がある他、字句に若干の異同がある。⑤鼎元……殿試の第一甲の三名（狀元、榜眼、探花）を言う。⑥銓曹……官員の選抜を行う部門の長官。吏部尚書のことを指すか。

【補説】図は、『狀元奇異編』の内容を描いたもの。

### 狀元秦鳴雷

嘉靖二十三年甲辰 廷試瞿景淳等三百七十人、擢秦鳴雷第一。

按、鳴雷、字子豫、號華峰、浙江臨海人。年二十七登第。父文參政、兄鳴夏右春坊。狀元録年十四時就傳。一寺中、適有召筭者、筭忽自運作字云、門外有甲辰狀元秦鳴雷、可請至。時鳴雷、方自家步至館、筭徑飛至寺門外、握其衣袖而入。此後常夢騎馬※上天門。是科吳情先定狀頭、因吳字北音曰無、聖上曰、無情豈宜居第一。正猶豫時、忽高懸殿旛結雷字。故 聖意欲得雷姓爲首、遍榜中覓之、無有。得鳴雷、即擢之、乃以吳爲探花。

【校勘】「飛」の字を補うべきであろう。



嘉靖二十三年（一五四四）殿試に臨んだ士人は瞿景淳（字は師道、号は昆湖、常熟の人）等三百七十人であり、秦鳴雷を第一位に選んだ。

考えるに、鳴雷は、字は子豫、号は華峰、浙江臨海の人である。二十七歳で登第した。父の文（字は從簡、弘治六年進士）は參政、兄の鳴夏（字は子升、嘉靖十一年進士）は右春坊であった。

『狀元録』十四歳の時、塾師に就いて学んだ。ある寺の中で、またまたまちりとりを持って来させると、ちりとりが勝手に動いて、「門外に甲

辰の状元秦鳴雷がいるので、招き入れるべし。」と字を描いた。この時鳴雷は、ちょうど家から歩いて塾に行くところであったが、ちりとりが寺の門の外に真っ直ぐ飛んで行き、彼の衣の袖を掲げて「寺の門に招き」入れた。これ以降、常に馬に跨って上天の門に飛んで行く夢を見た。

この科では呉情(字は以中、無錫の人)が当初は状元に決まっていたが、呉という字の北方音が「無」「と同じ」であることから、皇帝は、『無情』をどうして第一位にすることができようか。」と言って、ためらっているうちに、たちまち高所に掛かった殿旗が「ひるがえって」「雷」という字を描いた。それで皇帝の気持ちとしては雷という姓の者を状元にしたくて、あまねく合格者一覧を探してみたが、「雷姓の者は」いなかった。「しかしながら」鳴雷「という名」を見つけ出したので、ただちに彼を「状元に」抜擢し、そして呉を探花とした。

【注】①三百七十人……『嘉靖二十三年進士登科録』(天一閣明代科挙録選刊)によると、この年の進士は三百十二名であった。②状元録……『皇明歴科状元録』巻四。続く逸話を省略しているが、引用部分に字句の異同は無い。

③館……私塾のことを言う。

【補説】図は、秦鳴雷が馬に跨って天の門に登る夢を見ている場面。

状元李春芳

嘉靖二十六年丁未 廷試、胡正蒙等三百一人、擢李春芳第一。

按、春芳、字子實、號石麓、直隸興化人。年三十八及第。状元録註爲人和易淳雅、與人交有情。 廷試後、同志集飲於寓、有白云、某堂上遣官

至、延之内與語而別。人皆知來報傳臚之信、客皆賀之。坦然曰、謂拙卷亦與進 呈之列耳。註神色不動。人稱其雅度。又甲午秋、有士子赴鄉試、題詩于讀書之屋、而行尾句云、明歲看花三月麗、滿城桃李先春芳、蓋自寓耳。明年春榜、李春芳作状元、此詩爲之讖也。註



嘉靖二十六年(一五四七)殿試に臨んだ士人は胡正蒙(字は正伯、餘姚の人)等三百一人であり、李春芳を第一位に選んだ。

考えるに、春芳は、字は子実、号は石麓、直隸興化の人である。三十八歳で及第した。

『状元録』人柄は穏やかで純朴高雅、人と交わっては人情に厚かった。廷試の後、同志が宿に集まって飲んでいると、「某長官が役人を遣わしてきました。」と言うので、内に招き入れて話をしてから別れた。みなのは伝臚の通知を届けに来たのがわかったので、客は揃ってお祝いを言った。「すると、春芳は」平然として、「私の答案も「皇帝に」進呈する答案の列に加えられただけだ。」と言ひ、態度や表情に変化がなかった。人々は彼の品のある態度をたたえた。また、嘉靖十三年の秋、



受験生が郷試に赴く際、勉学に励んだ学舎「の壁」に詩を題してから出発した。「彼が作った詩の」尾聯には、「明年花を眺めるであろう三月の麗しい頃、街中の桃李の花は真っ先に春の芳しい香りをはなつてであろう」とあった。思うに自らの気持ちを寓したのである。翌年の春の試験で、李春芳が状元となったのは、この詩が予兆となったのである。

【注】① 状元録……『皇明歴科状元録』卷四。字句に異同は無い。② 來報傳臚之信……「傳臚之信」というのが具体的にどういうものであったかは未詳。

状元は、伝臚の儀式の際に、特別な役割が多々あったので事前に様々な準備が必要であった。③ 與進呈之列……第一甲の三名の答案は、閣老が文華殿で皇帝に進読したので、そのことを言うのである。林大欽の条の注⑤参照。

④ 明歳看花三月麗、滿城桃李先春芳……（訓読）「明歳花を見る三月の麗、滿城の桃李に先ず春芳あり」⑤ 春榜……ここでは殿試のこと。

【補説】図は、友人と酒を飲んでいる際に、殿試の捷報が届く様子を描いたもの。

【附記】本稿は、平成二十一年度科学研究費補助金（文部科学省特定領域研究）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」（領域代表：東京大学・小島毅）の（A01-02）「中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開」（研究代表者：早稲田大学・近藤一成）による研究成果の一部である。